いのちと地域を守る　毎月11日掲載　防災・減災のページ

■新生活 防災の視点で部屋選び

考える

耐震は？地盤は？教訓生かし確認シート

関西大・林准教授ら作成

静岡大防災総合センターは2009年、建物のエックスを促す。

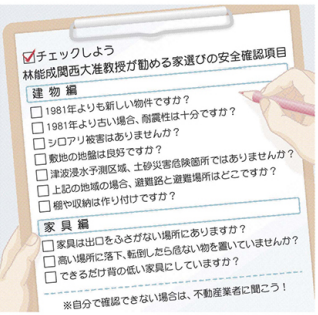
多くの若者が亡くなった阪神大震災の教訓を生かすことが狙い。建物の倒壊で子どもを亡くした、ありのままの姿を見せる学生たちに活用を呼び掛けている。

確認項目は①1981年よりも新しい家か②81年よりも古い場合は、耐震能は十分か③シロアリ被害はないか④敷地の地盤は良好か―の4点。81年に施行された新耐震基準の建築確認か、耐震補強の有無の確認を求めるほか、耐震性能を低下させる恐れがあるシロアリ被害の有無、敷地の地盤は良好か―の4点。

当時、静岡大でシートを作成した林准教授の准教授は「豊気がいいと新築志向が強く、結果的に耐震性が不十分な古い家をあまり選ばれない。逆に不景気だと、不本意ながら古い家を選ぶ学生もいる」と指摘。「大学生が、新社会人は自分で住居を選ぶ初めての機会だ。災害を意識しておくべきだ」と、将来、自分で家を買ったり、建てたりすると、きっかけになっている。

「あのとき、もっ少しまともな家に住むよう勧めていれば…」と旨賞の念にかられる親の体験談も、きっかけになっている。

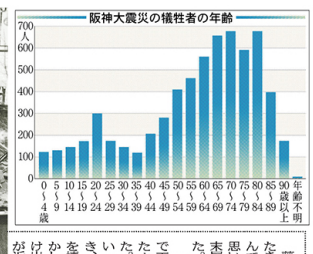
河北新報社は林能成関西大准教授の監修で「家選びの安全確認項目」チェックシートを作成した。河北新報オンラインニュースからダウンロードできます。トップページ「震災・防災」のバナーから入り「家選びの安全確認項目」のバナーをクリックした後、印刷してください。



木造2階共同に死者集中

卒業式シーズンの3月は、進学を控えた高校生や新社会人が心を弾ませながら、部屋探しに忙しい時期でもある。家賃、間取り、立地など、家選びのこだわりは、人によってさまざま。でも思い出してみよ う。1995年1月に発生した阪神大震災では、家屋の倒壊でたくさんの若者が自立った。数年間暮らす住居だから、部屋選びの基準に防災・減災の視点を加えてはどうだろう。

阪神大震災の犠牲者の年齢



公園からの環境再生団体（NPO）あおぞら財団（大阪府）の藤江徹さん（41）は、神戸大大学院生の時、修士論文で「阪神・淡路大震災における住宅被害による死者の発生条件の要因分析」をまとめた。

非木造、木造二階建て、木造長屋建て、木造共同低層のタイプごとに人間関係の家族構成、世帯主の年齢、収入などを分析。死者は①高齢者層の居住する老朽化した持ち家②若年層を含む低収入層が入居する借家（木造共同低層）③終戦前からの都市居住者の住む木造長屋―に集中していた。

木造共同低層はいわゆる木造2階のアパート。借家で低所得者層が多く、世帯主に若い層の親が高かった。全体の死者の2割が亡くなり、1世帯当たりの死者数は1・39人で、住宅のタイプの中で最も多かった。

阪神大震災の犠牲者の年齢はグラフの通り。たくさんの高齢者が亡くなった方で、若年層の中では20～24歳が、前後の年齢に比べて突出して多いことが分かる。

藤江さんも神戸大4年の時、多くの学生は文化住宅に住んでいた男子学生への聞いだった。修士論文の末尾に、次のように記した。

「彼は文化住宅の一階で下敷きになって生きたまま炎に包まれました。彼の友達と私は精いっぱいのこぎりを引き、2階の窓を飛び、壁を壊し、梁（はり）をかし、床をはぎ、彼を助け出そうとしました。火が近づいてくるのが分かったとき、毛布に包まれた状態で、彼は、私に『俺、助けるから』と言いました。私は『大丈夫、絶対助けるから』と彼に言い返した。彼の体も上半身が出て、もう少しというところでしたが、スキーの板と折れた柱がどうしてもとられず、彼を置いて行かなければなりませんでした。（中略）私の研究で彼のような人が一人でも減ればと思います」

救えなかった学生を思って

藤江さんが研究を始めたきっかけは、借家に住んでいた男子学生への思いだった。修士論文の末尾に、次のように記した。

「彼は文化住宅の一階で下敷きになって生きたまま炎に包まれました。彼の友達と私は精いっぱいのこぎりを引き、2階の窓を飛び、壁を壊し、梁（はり）をかし、床をはぎ、彼を助け出そうとしました。火が近づいてくるのが分かったとき、毛布に包まれた状態で、彼は、私に『俺、助けるから』と言いました。私は『大丈夫、絶対助けるから』と言い返した。彼の体も上半身が出て、もう少しというところでしたが、スキーの板と折れた柱がどうしてもとられず、彼を置いて行かなければなりませんでした。（中略）私の研究で彼のような人が一人でも減ればと思います」

地震で倒壊した民家から住人を救出する住民たち＝1995年1月17日、神戸市東灘区

■慶長三陸地震津波の検証

過小評価から脱却図る

探る

東北大助教　蝦名　裕一さん

「政宗の時代、千貫山まで津波が来たっていう話があるんだけど、知ってる？」

大震災の数年前、岩手県の市史編さん室に勤めていた際に、井口経明市長からこのような言葉を掛けられた。恥ずかしながら当時の私は全く知らず、まさか岩手内陸部の千貫山まで津波が来るようなことはないだろう、と半信半疑であった。2011年3月11日、長く激しい振動の後、仙台市宮城区に長三陸地震津波と呼ばれ、中心である研究室の外に避難し、携帯で「東北地方沿岸に大津波警報」の情報を知った瞬間、この言葉があった。

しかし大震災の後、あらためて歴史資料を読み直してみると、岩手県から福島県にかけての広い範囲を大津波が襲ったと、先人たちが体験した津波の惨状が克明に記されていたのである。

さらに、大津波の発生を踏まえて仙台藩の歴史を見直すと、大津波から聞もなく海岸部で実施された塩田開発や、黒松の植林による防潮林の形成は、被災地復興や防災対策という側面があることが分かってきた。

電気もコンクリートもない時代であるがゆえに、先人たちは自然の特性を最大限に活用した復興と防災をしてきたのである。

現在、私はこの400年前の大震災について、従来の通説「価されたイメージから脱却させたい」という思いを込めて、当時の東北地方のなぜ名、奥州とは、これほど大きな津波になるとは思いませんでした。海の近くに住んでいたお年寄りの人と、宮城県出中の民生児童委員の人が検証になり、とても残念です。

1（慶長16）年に、東北地方太平洋沿岸を襲った津波のことである。

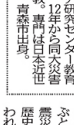
従来の研究での津波は、慶長三陸地震津波の検証、慶長三陸地震津波と呼ばれ、中心である研究室の外に避難し、携帯で「東北地方沿岸に大津波警報」の情報を知った瞬間、この言葉があった。

しかし大震災の後、あらためて歴史資料を読み直してみると、岩手県から福島県にかけての広い範囲を大津波が襲ったと、先人たちが体験した津波の惨状が克明に記されていたのである。

さらに、大津波の発生を踏まえて仙台藩の歴史を見直すと、大津波から聞もなく海岸部で実施された塩田開発や、黒松の植林による防潮林の形成は、被災地復興や防災対策という側面があることが分かってきた。

電気もコンクリートもない時代であるがゆえに、先人たちは自然の特性を最大限に活用した復興と防災をしてきたのである。

現在、私はこの400年前の大震災について、従来の通説「価されたイメージから脱却させたい」という思いを込めて、当時の東北地方のなぜ名、奥州とは、これほど大きな津波になるとは思いませんでした。海の近くに住んでいたお年寄りの人と、宮城県出中の民生児童委員の人が検証になり、とても残念です。


えびな・ゆういち　東北大大学院修了。同大東北アジア研究センター教育研究支援者を経て、12年から同大災害科学国際研究所助教。専門は日本近世史、落政史。38歳。青森市出身。

■自転車で高齢者の安否確認に奔走（宮城県山元町）

伝える

2011.3.11

内陸側からも津波迫る

青柳守彦さん

宮城県山元町の民生児童委員青柳守彦さん（68）は、震災が発生した後、自転車で1人暮らしのお年寄りの安否確認に奔走した。家々を回る間に、津波地域に迫った。

自宅の居間にいたときに、大きな揺れに襲われ、妻とテーブルの下に身を隠しました。家がきしむようにきしみ、棚の物が落ちました。

揺れが収まった後、自転車に乗って、お年寄りの家に出掛けました。国道6号の内陸側にあむ3人の無事を確認したが、携帯は仙台平野内陸の津波警報が鳴り、逃げなければ、と思った。

駅の近くの数軒の家を回ったが、びっくりして、固唾よりも高くなっている国道を自転車で1人暮らしのお年寄りの安否確認に奔走した。家々を回る間に、津波地域に迫った。

途中の住宅地では、住民たちが建物の外に出て、被害を確認したり、海の方を見たりしていました。内陸に避難する車があり見掛けましたが、住宅地に戻ったときに、国道の方向に広がった黒い地が、土煙を上げながら迫ってくるのが見えました。

自転車を乗り捨て、のり面を使い上方へ逃げました。やがて振動してきました。国道のガードに乗って、お年寄りの家に向かいました。

反対側に抜け出たところで驚きました。水は内陸側から迫ってきたのです。

国道の低い場所を越えた津波が、道路に沿って回り込んできたのでしょう。

国道に合流する坂道を駆け上がりました。陸まで水に慌てながら、ぎりぎりで津波から逃げ切ることができました。

大きな地震だったので津波が来ると思いましたが、これほど大きな津波になるとは思いませんでした。海の近くに住んでいたお年寄りの人と、宮城県出中の民生児童委員の人が検証になり、とても残念です。

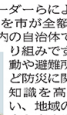
大きな津波被害を受けたJR坂元駅＝2011年3月20日（宮城県山元町提供）

現場から

3年で防災士150人養成へ

角田市総務部次長兼防災安全課長　仙石利幸さん（56）

角田市は新年度、東北福祉大と提携し、防災士養成支援事業に取り組みます。3年間で150人を目標に、各行政区の自主防災組織や消防団のリーダーらによる防災士の資格取得を市が全額補助します。宮城県内の自治体では初の取り組みです。



避難行動や避難所の運営など防災に関する専門知識を高めてもらい、地域の自主防災力を高めるのが狙いです。

1986年の阿武隈川の破堤による洪水など、市では過去に大きな水害がありました。浸水想定区域には市中心部の大部分が含まれ、要援護者の避難誘導など住民の協力が必要です。防災士養成を地域の連携を深めるの一つの契機にしたいです。

広域支援の活動を冊子に

山形県　危機管理課課長補佐　荻野章さん（51）

東日本大震災から3年を機に、被災地への職員派遣や物資輸送、被災者の受け入れなど、山形県が実施してきた広域支援活動を検証しています。今後の参考、教訓とするために、年度内にも結果を冊子にまとめます。

山形県は震災発生後、広域支援対策本部を設置して、緊急対応から中長期的取り組みまで、見直しを進めながら活動を続けてきました。

ピーク時に1万3000人を超えた避難者の受け入れなどは、県として初めての経験で、県内市町村との連携の重要性を再認識させられました。

職員の異動も進んでいます。新たな担当者が対応できるように、冊子を活用したいと思います。

■情報をお寄せください

防災・減災のページは、「いのちと地域を守る」をテーマに、読者とともに考え、作るページです。意見や感想、取り上げてほしい題材、防災に関する情報をお寄せください。巡回ワークショップ「むすび塾」の開催を希望する町内会などの団体も募集しています。宛先は〒980―8660仙台市青葉区五橋1の2の28、河北新報社報道部「防災・減災のページ」係。ファクスは022（264）2707。電子メールアドレスはbousai@po.kahoku.co.jp